治田先生が新しい本を出されます

伊東　通（十五期）

私たち十五期生にとってだけではないでしょうが、大変懐かしい治田先生が五冊目の本を出されます。

先生は今までに、「八景のメルヘン」（一九八八年）、「花のあるメルヘン」（一九八九年）、「五十年目の特別攻撃隊」（一九九六年）、「森の王子の物語―死と存在の意味を問う」（二〇〇五年）と（どれもインターネットで手に入れることができます。『治田成夫』で検索してください）四冊の本を出版されてきました。

今度、五月に文芸社から「意識と主体的存在―反物質主義の人間観―」という題名で文芸社セレクションという文庫本の体裁で出版されます（定価六〇〇円＋税）。

この著書について「あとがき」で先生ご自身が次のように書いておられます。

「物事を合理的に考えようとする、合理的教養人と言っていい現代の人々は、心の奥底で、自然科学的な存在観、自然科学の研究に前提されていると思われる唯物論的な還元主義を信じている。その一つとして、意識を含む心的な活動は、脳・神経が生み出したものとされる。

また、全宇宙は意義を持たない偶然の存在となり、その一部である人間も存在意義の支えのないものとなる。こうして人間は、意義の支えのない生と全くの無化である死という、二重の絶望を抱えた存在となる。

その反面、このような人間観に耐えられず、まったく非合理なオカルト的な思想に走ったり、科学的な認識を無視する、「宗教的」と称する妄信的な信仰にすがる人びとがいる。これは、知的存在である人間には相応しくない。

やはり、合理性を失わず、存在に値する存在意義を認め、そして物質主義に陥らないような人間観が、人間の本来の在り方に相応しく、また、それに根差しているとも考えられる。本書は、そのための基礎に当たるところを考えて、いくらか体系的に表したものである。こうした第一義の問題に関心をお持ちの方の参考になれば幸いである。」

哲学というのは出来合いの言葉で抽象的に考えることではなく、具体的で切実な問題を問い、解決をめざす時に、自分のつかんだ具体的で、ある確かな生き生きした感じ（ベルグソンなら直観というであろうが）を信じて、それを手がかりに粘り強く問い続けることを意味していると思う。

これは安易に既成の言葉を積み重ねて組み立てるものなどではなく、逆にその出来合いの意味を取り除いていきながら、その輪郭の柔らかな、しかし確かな手ごたえのあるものを今度は慎重に言語化する作業だと思われるが、先生のこの著作を読んでいるとそのことが実によくわかる（もっとも、私は先生の考えを理解できている訳ではないけれど）。

先生のこの著書を読んでいると、例えば、私の苦手なヘーゲルも実に生き生きとした実感に基づいて動的に弁証法をとらえていることがよく分かった。これは別に治田先生の本意ではないだろうが、私にとっては貴重なことだった。

事象を動的なものとして捉えようとする先生の精密で粘り強いアプローチ、極論を廃し、ある意味で「中道」を目指すようなアタックは、哲学するとはこういうことだという何よりのお手本である。

プロセス自体が哲学なのだ。奇異なことでなく当たり前のことを粘り強く問い続けることこそが哲学なのである。このことが今の私たちの社会には欠けていると思う。政治経済についてみていて特にそうかんじる。急がば回れという言葉が強く浮かんでくる。

この本は治田成夫という哲学者の「哲学のすすめ」である。そう強く思う。先生は現在、人間であるとはどういうことか、ということで本書の続編を執筆されておられとのこと。先生のご健康を祈ることや切である。